

B C G

1 接種の対象者、接種回数及び接種方法

対 象 年 齢	接種回数
生後1歳に至るまでの間にある者 (標準的な接種時期は生後5か月～8か月に至るまで)	1回

※「長期療養が必要な疾病などで定期の予防接種の機会を逸した者に対する特例」については、『定期接種実施マニュアル』を参照してください。

2 接種方法

原則として、上腕外側のほぼ中央部に接種する。

※ 肩峰に近い部分に接種するとケロイドを生じやすいので避けなければならない。

(1) 接種部位の消毒

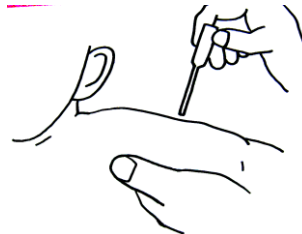
まず、接種部位をアルコール綿で消毒する。乾かない内はワクチンが死滅するので、よく乾いてからワクチンを滴下する。

(2) 具体的接種方法

① ワクチンの滴下と塗布

接種者は、被接種者の上腕を左手で下から握り、ほぼ水平に固定する。アルコールが乾くのを待って滴下用スポイドを垂直か、わずかに傾けて保持し、接種に十分な量(大きめの1滴)のワクチンを滴下する。(図ア)

(図ア)



その時、スポイドの先端が皮膚に触れないように注意する。

通常1滴で十分であるが、不十分であると思われるときは、さらにもう1滴加える。滴下されたワクチンを管針のツバの側面で上腕の縦方向に沿って幅約1.5cm、長さ約3cm程度の範囲に塗り広げる。(図イ)

(図イ)



② ワクチンの接種

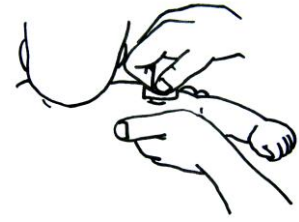
ワクチンを塗り広げた後、管針を皮膚面に垂直に保持し(図ウ)、上腕部を下から支えている左手で強く握って接種部位の皮膚を緊張させ、ツバの両端が皮膚に十分付くまで(通常、皮膚が5～6mmへこむ程度)管針を強く押して接種する。(図エ)

接種箇所数は2か所とする。2か所の押し方は、管針の円跡が相互に接するようにして腕の縦方向とツバの縦方向とが一致するようにする。2か所の接種が重なると局所反応が融合するおそれがあるので、必ず針痕が長方形に並ぶように接種する。(図オ)

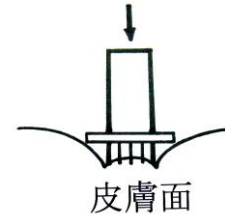
押し終わると、ワクチンを塗り広げたときと同様にツバの側面で皮膚上のワクチンを2～3回針痕になすりつける。

ときに接種した針痕から少量の出血をみることがあっても、そのまま放置しておく。もし接種の方法を誤った場合でも押し直しはしないこと。

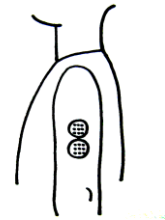
(図ウ)



(図エ)



(図オ)



(3) 接種後の注意

自然にワクチンが乾燥するようにそのまま待ち、直射日光や火気で乾かさないこと。

3 コツホ現象

接種後、コツホ現象を診断した場合は、保護者に報告の同意を得て、直ちに別紙「コツホ現象事例報告書」に記入して保健予防課に報告してください。なお、保護者の同意が得られない場合は、個人情報を除く事項を報告してください。